

# 技術の進歩がもたらす 人の幸せとは……？



illustration : sakuma kana

「昨日のテレビ番組に、僕のお父さんは精子バンク」というのがありましたでしょ!! ご覧になりましたか」

「え、視ました。私も夫は不要ないけど、子供の立場に立てばお父さんが精子バンクでは困るのではないかしらネ」

それはある政府系ホテルの喫茶室に於ける昼下りのご婦人達の会話でした。

私は偶然に隣席に座りました

たもので、ご婦人方の会話を聞いてしまいました。私には、科学や医療技術の発達は必ずしも人間を幸せにするとは限らず、場合によっては不幸にする場合もあるのですヨ!! と、疑問符を投げかけられたように想えたのでございます。私の処の老人ホームへ堂島様(94歳・仮名・男性)がご入居いただいたのは三年前のことでございます。

堂島様は、戦時中には駆逐艦に海軍将校として乗艦されておられた由、私は海軍式に肘を体に付けてスマートに敬礼をしてご覧に入れましたところ、とても喜んで下さいました程お元気な方でございます。

お孫様が付き添ってのご入居でございます。母が亡くなりましてからは、父と祖父との二人暮らしになりましたもので、仕事と家事の両方が父の肩に掛かることに

とも出来ず、ただ眼だけをちよつと右左にキョロキョロ!! と動かすことが出来るだけの状況でおられました。

なり疲れたのだと想います。父の体調が悪くなり、只今検査入院中なもので、祖父を独りで置くことは出来ない、とても心配しまして、急ぎお願いすることになりました」とのご挨拶をいただきました。

堂島様は威風堂々としてご体格もお宜しく、お顔のお道具建もまた、全てご立派な方でございます。

即ち、昔の方は役者顔と言

か」

と伺いますと、

「実は腎臓癌と言われてしまいました。父は祖父が心配するといけないから、祖父には内緒にするようにと申します」

「なるほど、承知致しました」

私はますます堂島様のご一家に愛情が湧いて、大好きになりましたもので、なんとかご息様も無事にご退院になり、お父様の会社のお仕事に復帰でき、堂島様も健康で幸せにご老後をお過ごしいただけるようにと、必死で頑張ろうと決心を致しましたのでございます。

私共のこの願いの甲斐がありましたのでしようか、ご息様もご退院になり、元の会社勤務に復帰され、堂島様もとてもお元気で毎日をお過ごしただけでした。

堂島様の本来のお仕事は宮内庁御用達のお菓子屋さんとかで、お菓子にはとてももうるさい方でいらっしやいます。

お菓子を差し上げ、一口召し上がりますと、「この小豆は○○産の小豆だ」とか「お砂糖

はこれじゃなくて△△を使ったほうが良い」等とお詳しいのでございます。

食後のデザートには一流品を使えませんが、毎回冷汗をかきながらご講義を伺いまして、それなりにお菓子の歴史も多少覚えさせていただき、お菓子も一緒に試食させていただくことになりました。そのためにも体重も増加して、毎日鏡を前にして悩む楽しい日々を過しておりました。先般、年に一度の定期健診で堂島様は、肺癌と診断をいただき、加療の要ありとのことでございます。

ビックリいたしました。3か月程前にご息様が癌の再発でご入院となりましたことが堂島様の体調を悪化させたのだと存じます。詳しくは説明致しませんが、とても心配しておられました。

堂島様には内緒に致しておりましたが、ご息様は膀胱癌になっておられました手術をされたのでございます。

お見舞いに参りました。酸素テントの中で、十数本のチューブに繋がれ、動くこ

とも出来ず、ただ眼だけをちよつと右左にキョロキョロ!! と動かすことが出来るだけの状況でおられました。

お父上やお子様のことをどんなにか案じておられるのでしようから、案ずるあまり藁にも縋る気持ちで手術に踏み切られたのだと想いました。本当は絶対に快(な)ることなどないのです。医師はそれを充分承知の上で執刀されたはずでございます。

悲しみと怒りがゴチャゴチャになった気持ちの胸の中に溢れまして、3日程あのキョロキョロ!! キョロキョロ!! と動く眼と怒りと悲しみとのゴチャゴチャが夜中に私の頭の中に充満して来まして、安眠出来ませんでした。

そんな時に堂島様は肺癌と診断されたのでございます。

「ソッ!!」として置いていただけかもしれません。夢中でお孫様をお願い申しました。ご息様はとうとう社会復帰をなさることなくお他界になりましたが、堂島様はマズマズで今もホームでお過ごし

いただいております。

肺癌は何故か頭の方へ転移する性格がありますよう、言葉がハッキリしなくなり、歩行が困難となり、判断力もあまり良好ではございません。鼻水、咳は常々出ております。しかし、よく召上ります。体中何処も痛むことがありません。

90歳を過ぎた老人にとりましては健康体であっても、1年間の歳月は厳しいものですが、ましてご病気の体です。多少衰えられました、ケーキでもうなぎの蒲焼でも美味しそうに召上ります。

「美味しいでしょう!!」と申し上げれば、「ウン!!」とうなずかれます。うなずくお姿を見るだけで幸せ一杯になります。

ご息様の場合、快らないことがハッキリしています。

われませんが、眼も鼻も口も大きくて印象的なのでございます。お孫様は、「父のほうが祖父よりも背丈も低く、体重も軽いのです。何しろ体が小さいのに具合が悪くなりましたもので、病院では検査々と検査のために人間の体が在るような扱いで、体重が減ったのは検査のためだと想っております」と苦笑されました。

「何処がお悪いのでしょうか」に、何故8時間も掛けて手術をする必要があったのでしょうか。怒りがこみあげてきます。昔は膀胱を摘出したら生きてはいけないと信じられていました。

数か月であっても生きていたことは大変な進歩ではあります。何か命を病院のパソコンシートのためかあるいは学術論文のために使われているように想えまして、悲しい気分になるのでございます。

精子バンクの冷凍精子で子供が生れることも素晴らしい技術でございますが、床にお飯粒をこぼさないで召し上っていたいたなどといういかにもローテクノロジーの技術を堂島様と喜び合って、「今日は良かった!!」と熱いタオルでお顔を最後に拭く幸福感も、仲々と想うのでございます。

岩城祐子  
大正13年栃木県生まれ、昭和54年に都市型有料老人ホームの先駆けとなる施設を開設、平成13年に特別擁護老人ホームを、平成18年に高齢者長期滞在型ホテルを開設、独特の語り口調が特徴で、著書多数。